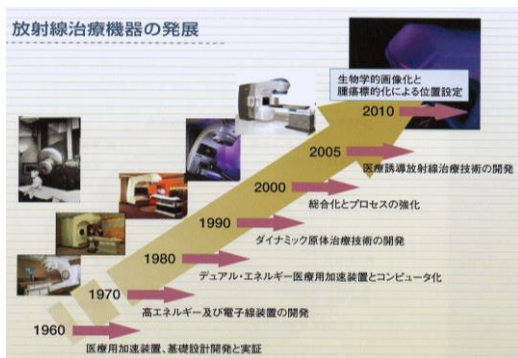
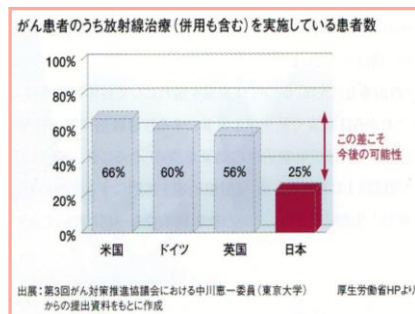


# 切らずに治す放射線治療

## 放射線科: 斎藤泰雄 (がん診療部第1部長)

国民の高齢化により、わが国のがん罹患率は増加を続け、「2人に1人が癌に罹り、3人に1人が癌で死亡する」時代を迎えようとしています。このような状況を受け、2007年4月1日に施行されたがん対策基本法及びがん対策基本計画をもとに、国も本格的ながん対策に取り組み始めました。その中で、欧米の半分以下しか実施されていない放射線治療の拡充が重点項目の一つになっています(右図)。



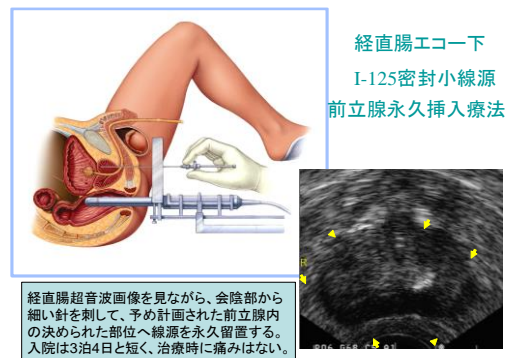
コンピュータの発達を受けて、ここ10年間の外部放射線治療の進歩は目覚しく(左図)、二次元(平面)照射から三次元(立体)照射に移行し、安心・安全・高精度の治療になっています。三次元原体照射を標準に、強度変調放射線治療(IMRT)や画像誘導放射線治療(IGRT)など極めて精度の高い照射技術が実現しています。また、X線より線量分布が優れ、生物学的効果が高い重粒子線治療も先進医療として大きな成果を上げています。

一方、針やシードに加工した放射性同位元素を用いる密封小線源治療も根治性の高い治療法です。特に、ヨウ素 125 シード線源を前立腺内に永久

留置する前立腺永久挿入療法は、早期前立腺癌の根治療法として注目されています。わが国では2003年に導入され、当院も2007年3月から実施しています。患者さんの肉体的負担は少なく、入院期間も3泊4日と極めて短期間で済んでいます(右図)。

放射線治療はさまざまな癌に対して根治性の高い治療法ですが、手術や抗がん剤にはない特徴として、骨転移などによる痛みの軽減、腫瘍による気道閉塞・黄疸・上大静脈症候群などの改善、癌からの出血を止めるなど、患者さんの苦痛を緩和する治療効果も高いのです。

放射線治療のキーワードは、“切らずに治す”、“形と機能が残る”、“体にやさしい”、“機械がハイテク”の4Kです。



当院には、日本放射線腫瘍学会認定の放射線治療専門医(斎藤)が常勤しており、4名の治療担当技師とともに責任をもって放射線治療を行っています。

このように、放射線治療の将来はばら色に見えますが、大きな問題を抱えています。小児科医や産科医、麻酔科医等と同様、放射線治療医の数も極端に不足しているのです。私のような団塊の世代が高齢化する2015年には放射線治療が必要な患者数は2005年の倍以上の36万人超と予想されています(左図)。この需要をまかなうには医師数が絶対的に足りず、放射線治療が受けられない人や数ヶ月予約待ちの方が続出すると考えられます。私どもは、わが国の癌治療が2015年に崩壊するのではないかと懸念しています。国民の健康を守るために、医師不足を早急に改善する必要があります。

